

## 石垣りんのうた声

のなか 夕子

あまりに暑い日が続き、朝から元気なのは蝉ばかり、人間はぐったり。とは言え、蝉の声がしなければ夏ではなく、長い年月を地中で過ごし、やっと地上に出てきたと思っただけ七日しか生きられないこの生きものに思いを託す人は多い。

私が資料整理をしている詩人石垣りんにも蝉の詩がある。八十二歳のりんさんはぬけがらで、羽化していった小さなことばにせめて七日歌ってほしいと願っている、そんな詩。これは詩集『やさしい言葉』が再刊された時に書かれた。「小さなことば」はその詩たちを表している。新聞に詩集の広告が載り、その嬉しさと感謝のことばと共に出版元へ贈られた。りんさんは、自分のままならぬ毎日を昇華させるために詩を書いていたよいうな人で、生前四冊の詩集しか出してない。恬淡としているように感じていたのだけれど、他人に自分の詩を読んでほしいという思いもあったのだなあと、これを見つけて思った。自らの願いを「いのちの限りうたい終えてよ」とりんさんにしては湿度が高い表現にしたのは、公になることを考えていなかったからかもしれない。りんさんの意に反すると思いつつ、世に出してしまったのは、これがまとまった形でのりんさんの最後の



詩、辞世の詩とも言うべきものかと思えたからだ。それから、詩を見つけたのが嬉しかったから。

私が、南伊豆町立図書館に通い出したのは五年前。りんさんのご両親が南伊豆の出身という縁で建てられた、付属の石垣りん文学記念室の資料を整理するため。片付けられない人ということばが一言言われたが、りんさんはまさに片付けられない人だった。詩から随筆から講演原稿から原稿用紙がどっさり。自分の作品またそれ以外の切り抜き、コピーもどっさり。詩は詩でおおよそまとまっていたけれど、それ以外の随筆や講演の原稿の中に詩が紛れていることもあって、全体を見るまで詩だけの整理すら終わらなかった。（詩作品の記録整理に四年かかった。）題が書かれていないもの、同じ作品でも題が変更されているもの、断片しかないもの、大幅に改稿してあるものなど、状態も様々。年代別にも詩集別にもなっておらず、ある程度作品ごとまとまっている束に、他の作品の原稿用紙の片々が、漂っていた。作品ごとに、整理して記録しての作業は終わりがなかなか見えず、片付けられなかったりりんさんをほんのちょっと呪った。同世代でりんさんの一年後に亡くなられた茨木の子さんは、死後刊行するように箱に詩をまとめてあった。『茨木の子の献立帖』によると、新聞、雑誌などから切り抜いたものを貼ったスクラップが五十冊ほど残されていたそうだ。それに比べてりんさんは、貼られていたものもあったが、ほとんどが切りっぱなし。でも、片づけられなかったから、私のような生前面識もなかった者が、りんさんの原稿を見ることができると、思っただけで作業を続けた。そんなことから、蝉の詩は私にはごほうびのように思えたのだ。りんさんの詩人としての思いを見つけたと。

りんさんには「蝉」（『夜の太鼓』所収）という随筆がある。随筆の前半は福岡の旅で出会った、樹齢二百年あまりの楠の大木に二匹並んで羽化した蝉について書かれている。ころもちハの字形に寄り添った蝉の抜け殻。なんだか物語ができそうなのだけれど、りんさんはこの随筆に書いてあるだけで詩にはしていない。

この抜け殻の写真を最近、書簡の整理をしていて見つけた。文章中に出てくる、最初にふたつの抜け殻を見つけたNさんが、当時雑誌に掲載されたこの文章を読んであわてて送ってきていたのだ。写真全面がほぼ樹肌、

ちようど真ん中に小さい突起様のものがふたつ並んでいる。それが抜け殻。ちようど石垣りん文学記念室の展示で、「蟬」も紹介しようとしていた私はしめしめ、と思った。目を凝らさなければ、説明されなければわからないほどの大きなのに、あえて展示品に入れてしまったのである。文学関係の展示はどうしても地味になってしまう。りんさんの自筆原稿を見ることができていい、と言ってもらえて、それはその通りなのだけれど、どうも見映えがしない。「石垣りんのベレー帽」という展示では、りんさんの若い時の写真や使っていたベレー帽やブローチを展示したのだが、いつもいつもそうはいかない。写真は、ちようどよいアクセントになる。今回の展示は「石垣りん旅の空」。りんさんは銀行での勤めを辞めた後、講演などで各地へ呼ばれることが多くなり、北は青森、南は沖縄まで出かけている。福岡もそういう場所のひとつ。

展示作業を終えて、まず南伊豆図書館の方たちに見てもらった。この写真を指差しながら説明すると、そう言えば、今朝おんぶしている蟬の抜け殻があったよね、と言われた。

えっ、どこ、とみんなで外に出た。あれー、ないね。風で落ちちゃったかな、などと言っていると、地面に落ちていたのを発見。幸い、落ちてもおんぶしたままだった。どういうことだろうね。この下の蟬がまず羽化して、その後よりによってそこを選んで上のが羽化したんだね。ほんとうにどうしてだろう。力入れにくそうだけど。

桜の木の下で私たちは、しばし自然のふしぎに思いをはせた。りんさんたちが見たのは二匹横に並んだ蟬。これは縦ではなく、上下に並んだというのだろうか。人だったら双子のよう。何にせよ、ほとんど同じ時に日の光を見てそして同じころ地に横たわる二匹の蟬。その抜け殻。

手渡された抜け殻をさらにしげしげと見る。甲冑のような硬い殻の、背中だけがぱっかりと割れ、目玉、細かい足、樹液を吸うための管もが損なわれない状態で、ある。優れた工芸品のようだ。子どもころからこの精巧さがふしぎだった。どうすればこんなにするりと抜け出せるのだろうか。自分が蟬だったらきっと失敗してしまふ。



抜け殻と言えば、思い起こされることがある。子ども会のラジオ体操はお寺の境内でやっていた。参道でも境内でも蝉の鳴き声が降るようにしていた。もちろん毎日必ず蝉の抜け殻を見つけた。妹は特に虫好きというわけではないのに、蝉の抜け殻を集めていた。抜け殻はふた付きの空き箱に入れて、母の文机の下に置いてあった気がする。ラジオ体操に行けば毎朝手に入るのだから、どんどん増えていったと思うのに、秋になってそれをどうしたのか覚えていない。妹がなぜ抜け殻を集めていたのかも忘れてしまった。聞かなかったのかもしれない。

りんさんのことを調べていて、りんさんの師にあたる伊藤信吉さんも私の妹と同じように蝉の抜け殻を集めていたらしいと知った。詩人、評論家として大きな仕事をされた方なのに、まるで子どものようなようだ。思わずやりとしてしまった。手元に文章がないので、はっきりとしたことは書けない。形に魅入られたのか、地上でのたった七日の命に惹かれたのか。ともあれ、蝉は人を魅了する。

随筆「蝉」の後半は静岡のできごと。東海道は丸子の宿で木と勘違いしたか、りんさんの体を離れぬ蝉のお話。

りんさんの来静は、これもまた講演に呼ばれてだ。私は地元民の常で丸子でとろろを食べたことはないのだが、講演の主催者が、せっかく静岡に来たのだからと連れていってくれたのだろう。そんな少々かしこまった席で座敷に座り膳を前にして、体を蝉が這っているなんて、気になってせっかくのとろろも味わえなかったのではないだろうか。想像するだにおかしい。福岡の抜け殻は小さいからつくつくほうしかと推測されているけれど、こちらはどうか。あぶらぜみやみんぜみ、くまぜみだったら、そうとう気になってしまいうだ。ジジジと鳴いて飛んできたところからあぶらぜみかもしれない。同席の方たちは気がついていたのである。うか。もじもじするりんさんに、「りんさん、まあ蝉に好かれて。」なんてことばがかけられていたかもしれない。

それにしても本当に蝉を体に這わせたままで、箸を進めていったのだろうか。それも一興かもしれないけれど、ひょいと庭先に置いてあげればと思わなくてもいい。りんさんにそうさせなかったのは、どんな思いだろう。

随筆にもあるが、この珍事は「恋唄」という詩になっている。りんさんには他にない散文詩だ。詩の最後に「あの別れが私をせつなくする」「蝉よ蝉よ また逢いたい」とりんさんは言う。食事を終えて車に乗ったものの連れ帰るにはためらわれて、やはり木陰に降ろして、りんさんと蝉は別れた。「細い足のぎざぎざで しがみついてきたかすかな感触。」とりんさんは別れ難かった。自分にしがみついて離れぬもの。愛しい思い。

だが、「恋唄」は、自分にしがみついてる者への愛おしさだけをうたっているのではない。りんさんにしがみついている蝉は、生きていくということにしがみついているのだ。夏の虫たち―蝉だけでなく、カナブンもカブトムシもあのぎざぎざの足で、今いる場所にしがみついて離れない。無理に引き離そうとすると細い足がちぎれてしまいそうの手加減してしまう。その強い生への力。りんさんの最後の詩でりんさんが「今日という日にしがみついている。」ように。同じように必死で生きる小さなものへの共感。生きとし生けるものへの愛しさ、それがりんさんの「恋唄」。福岡の寄り添う蝉でなく、生にしがみつく蝉で恋唄をうたうのがりんさん。そんなりんさんの詩を、蝉の声の中でよむ暑い夏。